

# 舟運・河岸復活に関する研究

Studies on Restoration of Riverboat Transportation and Riverside

研究第3部 主任研究員 大手俊治

研究第3部 主任研究員 江上和也

リバーフロント研究所長 小池達男

利根川は、明治期まで東北や房総と江戸との人や物資の往来を支える広域的な水上ネットワークを形成する重要な交通路であった。また、沿川には船着場と町が一体となった河岸<sup>かし</sup>が形成され、多くの舟や人が集まって文化や産業等の賑わいを作りだしていたが、現在ではそうした姿は見られなくなっている。

近年、良好な河川環境と地域づくりを目指して建設省は、巡回船を活用した体験乗船の実施や、地震災害時に即応する為の緊急船着場を整備・計画しつつある。また、沿川自治体には、利根川を地域の資源として位置づけ、魅力ある町づくりに活かそうという動きもある。

本研究はこの様な背景のもと、水辺と地域が一体となって利根川の魅力を高め地域の活性化を促することを目的に、利根川の未来の姿を考える一方策を舟運・河岸復活構想として検討した。具体的には、地域の特性に応じた4つのブロック毎に、舟運・河岸復活計画やその計画を実現していくための行動計画を検討した。

その結果、舟運・河岸の復活を実現するためには、行政主導では限界があり、地域住民が主体となって行政と連携した「町おこし」、「川おこし」等の活動を実践することが重要であることがわかった。

**キーワード：**舟運・河岸復活、災害時の舟運、地域活性化、交流、パートナーシップ、連携、学習、土砂運搬

The Tone River was an important traffic route in a broad water network in which people and commodities went back and forth between Tohoku, Boso and Edo (currently Tokyo) up to the late 19th century. Wharfs integrated with the towns along the riverside were the sites where many boats and people bustled, and gathered. Those places eventually developed into a foundation of culture and industry. Today, such situation no longer exists.

The Ministry of Construction has strived to promote ideal river environment and the community works. Examples include emergency wharf preparation for earthquake disaster and providing programs using patrol vessels for the people to experience boat riding. Several municipalities along the river have positioned Tone River as a local resource to make their towns attractive.

This study drew up a concept on restoration of riverboat transportation and the riverside in and along the Tone River. The concept shows a plan of the restoration for four blocks divided by regional characteristics and the action plan..

As a result, it was found that "town development" and "river development" activities linked with the government and lead by the community was vital to ensure that the program was successful since there were limitations to what government-lead programs could do.

**Keywords:** Riverboat Transportation, Riverside Restoration, Local Revitalization, Partnership, Tie-up, Learning, and Soil Transportation.

## はじめに

利根川東遷以来、利根川は物流や観光、文人等が往来する重要な交通路として関東全域のみならず阿武隈川や北上川などの東北地方と結ばれ、その繁栄は明治時代まで続いていた。また、沿川には、船着場とその背後の町が一体となった河岸が形成され、文化や産業等の賑わいを作りだしていた。

しかし、鉄道の開通や自動車の普及により経済性やスピード化にそぐわなくなり、利根川の舟運は大正時代以降衰退し、潮来や佐原の「十二橋巡り」の観光舟運など、一部で渡船や産業の手段として活用されているのみである。

近年、沿川自治体においては、利根川を地域の重要な共通財産として認識し、舟運・河岸の復活をキーワードにして街づくり等を積極的に行う気運が高まり、建設省においては巡視船を活用した体験乗船の実施、地震災害時に備えた河川緊急用船着場の整備、また平常時の河川巡視やスーパー堤防整備の為の土砂運搬等、舟運・河岸復活への活動を展開しつつある。

また、利根川下流域は、河口から取手まで80kmにも及ぶ可航域をもち、かつての舟運を現代のニーズに即して復活する素地があると考えられる。

本研究では、利根川筋の環境資源を21世紀に継承するために、舟運・河岸の復活を起点として、水辺と地域が一体となって利根川の魅力を高め・地域の活性化を促すことを目的とする。そのためには、震災等の緊急時に備えた救援ルートや施設整備の構築をきっかけに進めることが舟運復活の一策と考える。そこで、舟運・河岸復活計画や計画を実現していくための行動計画を検討し、「舟運・河岸復活構想」として提案した。

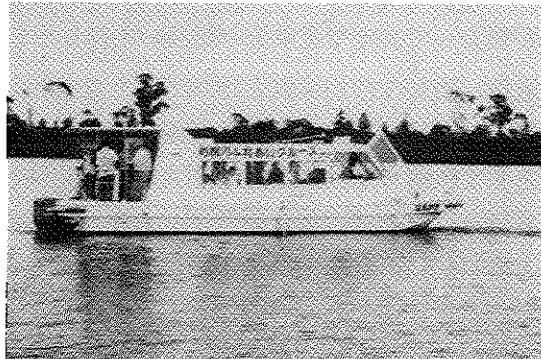
利根川における舟運は、かつては物流を中心とした舟運であった。今後、人々の余暇活動やゆとりを求める現代に即したレクリエーション機能を持った舟運復活を目指すものである。

## 1. 舟運の現状と利根川下流の魅力

### 1-1 舟運の現状

利根川下流域では、富田・津宮等の渡船、佐原の小野川を活用したシャトル船のイベント運航、加藤洲十二橋めぐり等の遊覧船が運航されている程度である。

一方、建設省では、土砂浚渫船、河川巡視船が活動しており、平成11年度から巡視船を用いた体験乗船を実施し、川に親しみ・川を学んでもらう取り組みを行っている。



取手付近での体験乗船

Boat-riding experience at Toride.



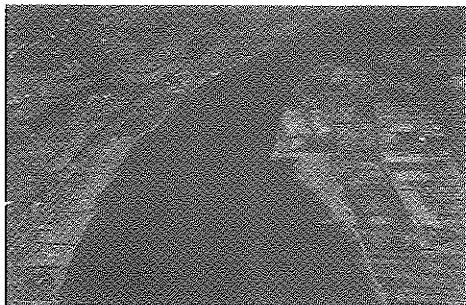
取手市小文間での乗船による環境教育  
Environmental Education on Boat-Riding at Omonma, Toride City

### 1-2 利根川下流の魅力

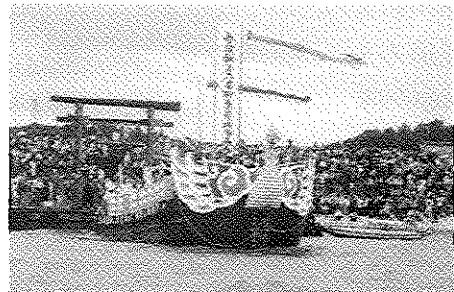
沿川のまちづくり・川づくりに寄与するため、舟運河岸復活に向けて以下に示すような利根川下流域の魅力を活かして行くことが必要である。

#### (1) 雄大な自然の姿

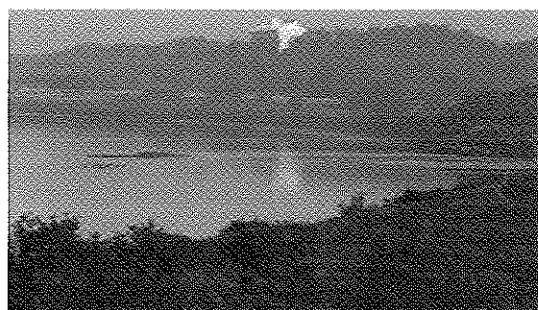
- ・首都圏ではみられない、遮蔽物のない広大な水面と空間の広がりを持っている。
- ・豊かな水量や自然地の緑と広い空間が、人々の心を開放的にする広大な風景をつくりだしている。



利根川下流部の様子  
Scene of Downstream Tone River



香取神社の式年神幸祭  
Annual Katori Shrine Festival



取手市小文間付近の自然地  
Natural Environment Around Omonma,  
Toride City

## (2) 豊かな自然と沿川の歴史・文化

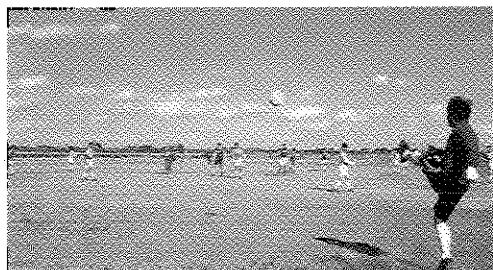
- ・取手市古文間や小見川町付近には、野鳥の生息地など貴重な自然が残されている。
- ・鹿島神宮・香取神宮・息栖神社・成田山新勝寺・龍生院など歴史的な寺社が多くあり、参拝客で賑わっている。
- ・あやめ祭りや佐原の大祭、利根町の川施餓鬼（灯籠流し）、神崎の流鏑馬など、利根川と関連した祭りが多い。



小見川付近のヨシ原  
Fen field around Omigawa

## (3) 多様なレクレーションと川の楽しみ

- ・佐原市・潮来町を中心とする水郷地域と銚子市の犬吠埼周辺が、主な観光地となっており、佐原市では、年間370万人の観光客がおとずれている。
- ・高水敷を利用したスポーツや、カヌー、水上スキーなど広大な水面を利用したレクリエーションなどが行われている。
- ・船があることにより、利根川遊覧や釣り、屋形船等、色々な楽しみ方ができる。



高水敷でのスポーツ  
Sports on the Major Bed



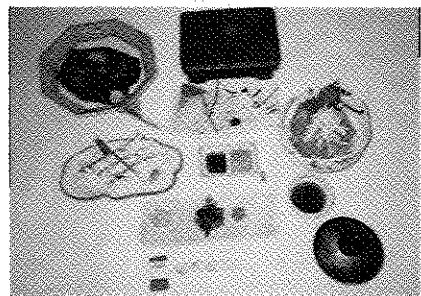
カヌーによる川遊び  
Canoeing In the River

#### (4) 沿川のまちとのつながり

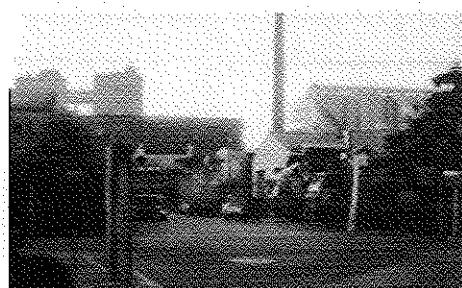
- ・佐原市や小見川町など、沿川地域は利根川の舟運・河岸を基礎として発展した歴史的背景持っている。このため、かつての舟運・河岸復活の魅力を受け入れられやすい素地があると考えられる。
- ・市街地や主要観光施設の多くは利根川に近接して立地しており、利根川を軸とした舟運の連携が可能となる。



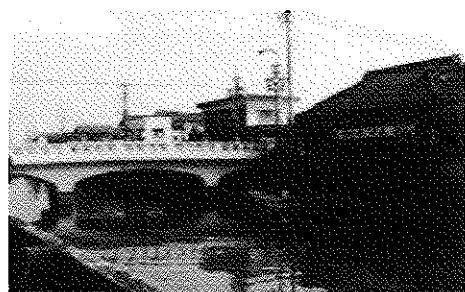
小野川と佐原の町並み  
Townscape of Ono River and Sawara



川魚料理  
Food Cuisines



銚子の醤油工場  
Soy Sauce Factory in Choshi



黒部川と小見川の町並み  
Townscape of Kurobe River and Omigawa

#### (5) 食と伝統産業

- ・利根川は、古来より漁業が盛んで、川魚料理が地域を代表する味覚となっている。
- ・現在でも銚子を中心として醤油・酒の醸造業が盛んである。これは、舟運により、原料の入手、および製品の江戸への出荷が容易であったことにはかならない。



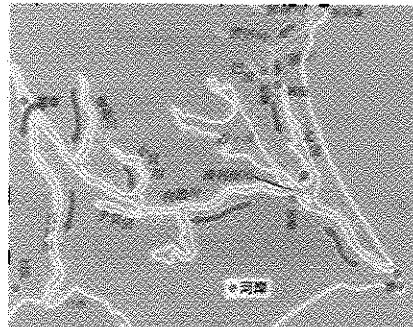
川での水生生物調査  
Aquatic Organism Survey in River



川で学習する子供たち  
Children Studying at River

#### (7) 広域的なつながり

- ・利根川舟運には、かつては北上川等、広い地域を結んでいたという歴史的素地があり、可航区域が長く舟運により利根川の上下流を結ぶことも可能である。また、支川により、霞ヶ浦、東京湾などとつながりをもつことが可能である。



かつての広域的な舟運ルート  
Former Expanse Boat Route During Ancient Times



北上川流域連携交流会との交流  
Exchange with the Kitakami River Area Friendship Gathering

## 2. 舟運・河岸復活構想の検討

舟運・河岸復活構想では、利根川下流域の歴史的背景や魅力をもとに、舟運・河岸を復活させるための方針について検討した。また、舟運ルート計画を、後述するハード面での具体的な計画として提案した。

具体的取り組みについては、考えられる実施項目を列挙するに留め、実施計画の立案は今後の課題とした。

### 2-1 基本的考え方

#### (1) 舟運・河岸復活計画の目的

利根川沿川の自治体と住民が一体となって、地域の町づくり、川づくりを推進していくための一策として舟運・河岸復活計画を策定する。この計画は、舟運を町づくりに活かすことにより、広域的な交流の促進、観光や地場産業等の活性化、魅力ある地域づくり、地域防災との連携等を図り、地域の活動を活性化させるものである。

#### (2) 基本テーマと基本方針

##### 1) 基本テーマ

「舟運の復活からきり拓く 利根川の未来」

##### 2) 舟運・河岸復活に向けての基本方針

- ・地域の個性や魅力をたかめるため、川と地域が一体となった河岸を復活する。
- ・多様な舟運の利用を促す利根川水上ルートをつくる。
- ・舟運・河岸を学習の場とし、川に親しむ活動を開催する。
- ・災害時に備えた緊急輸送を可能にする。

#### (3) 舟運・河岸復活計画の内容

テーマ・方針を踏まえて、舟運運航の基礎整備を行うハード面での整備計画、人々の関心を高め、舟運を地域づくりに活かしていくソフト面での整備計画と、舟運・河岸復活を地域に根づかせていくための、地域の独自性を活かした特徴ある舟運を行うとともに、沿川市町村・住民が一体となって取り組んでいくための行政と住民の協働計画で構成される。

## 2-2 整備計画

### (1) ハードに関する計画

#### 1) ブロック計画

利根川下流域では、可航域の延長が80kmにおよぶことから、地域の自然的・社会的条件、歴史的背景、計画・構想等を踏

まえた利根川と支川を4つのブロックに分割し、それぞれの特徴ある舟運・河岸の復活を目指す。

図2-1にブロック割をふまえた取り組みイメージ図を示す。

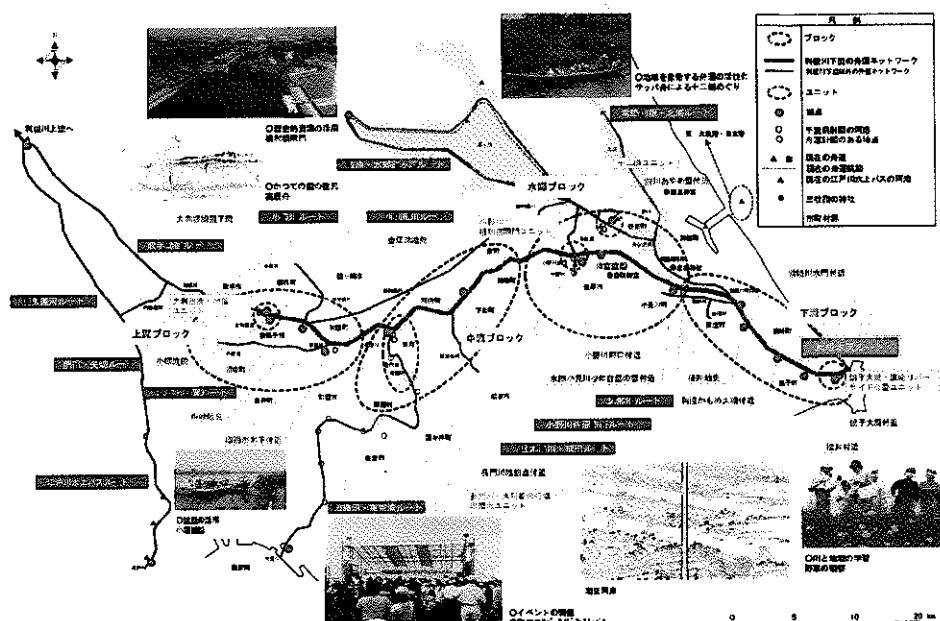


図2-1 下流域全体での取り組みイメージ  
Fig.2-1 Image of Measures in Overall Downstream Area

#### 2) ネットワーク計画

舟運の魅力を高めていくためには、舟運により沿川の町や資源を結びづけ、人や産物の動きを創り出すためのネットワークを図る必要がある。

このネットワークには、次のようなものがある。

- ① ブロック内ネットワーク：ブロック内の町や観光資源などを結ぶ。
- ② ブロック間ネットワーク：各ブロック間を連絡し、上下流をひとつにする。
- ③ 広域ネットワーク：利根川下流と他の流域を結び、広域的な広がりを持つ。

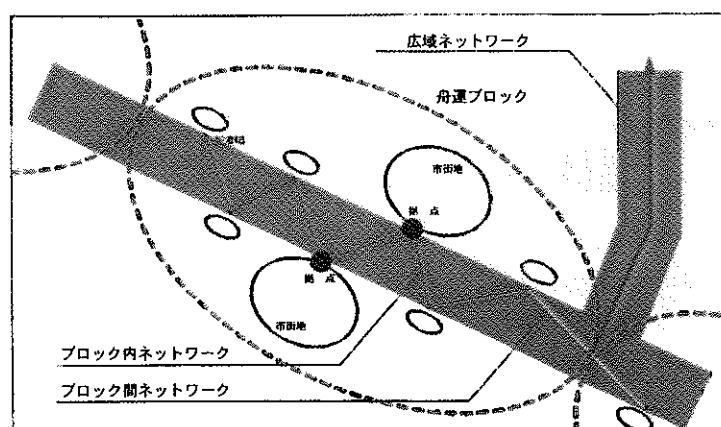


図2-2 ネットワークのイメージ  
Fig. Network Image

### 3) 抛点計画

利根川と市街地・交通結節点など、人が集まりやすく、複合的な機能（観光機能、

交流機能、学習機能、防災機能)をもつて  
いるところを拠点として必要な箇所に配置  
し、それぞれのブロックでの核とする。

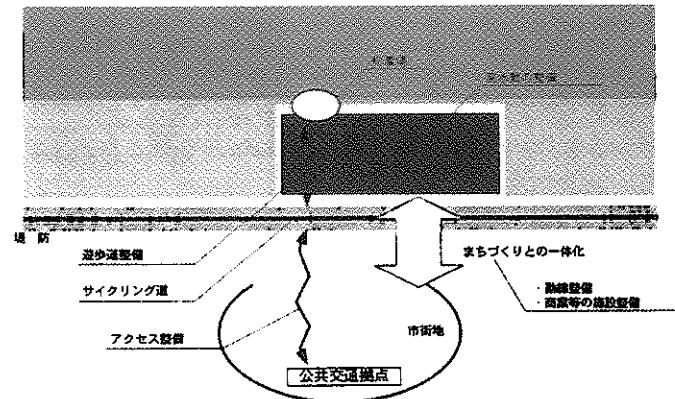


図2-3 投点のイメージ

Fig.2-3 Base Image

#### 4) ブロック毎の復活計画（案）の提案

利根川下流域の4つのブロック毎に、抽出した拠点・資源をネットワーク化に

より舟運ルート計画を提案する。

各ブロックの舟運・河岸復活イメージ図を以下に示す。

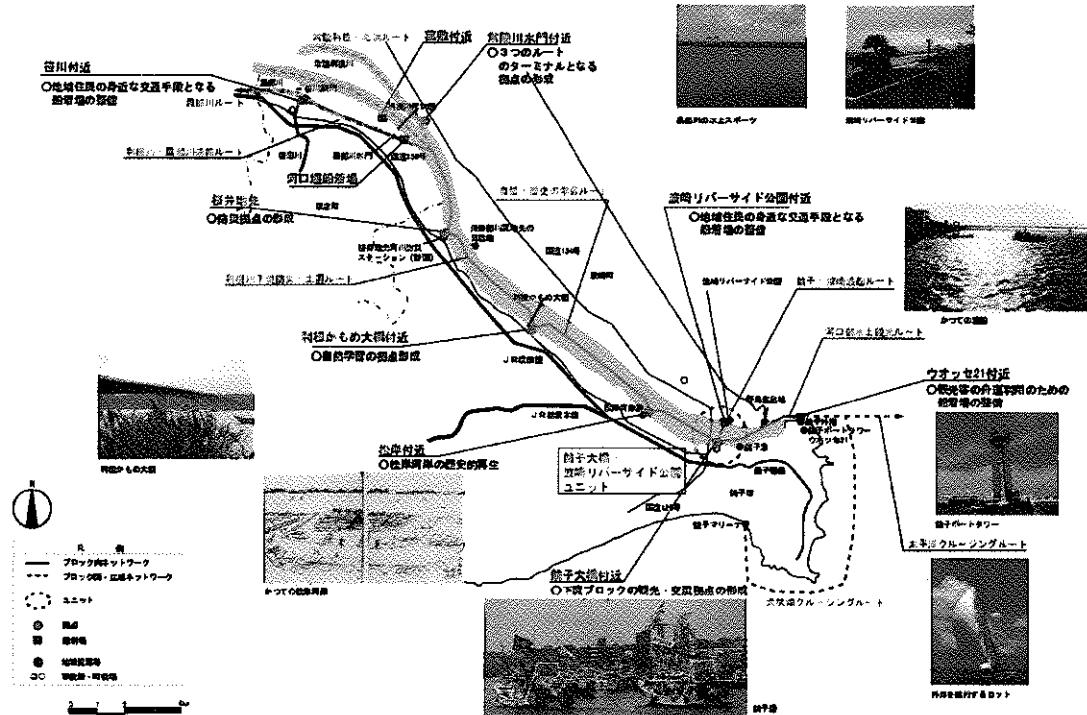


図2-4 下流ブロックの舟運・河岸復活イメージ図

**Fig.2-4** Imaginary Diagram of Boat Transport and Restoration of the Riverside in Downstream Block

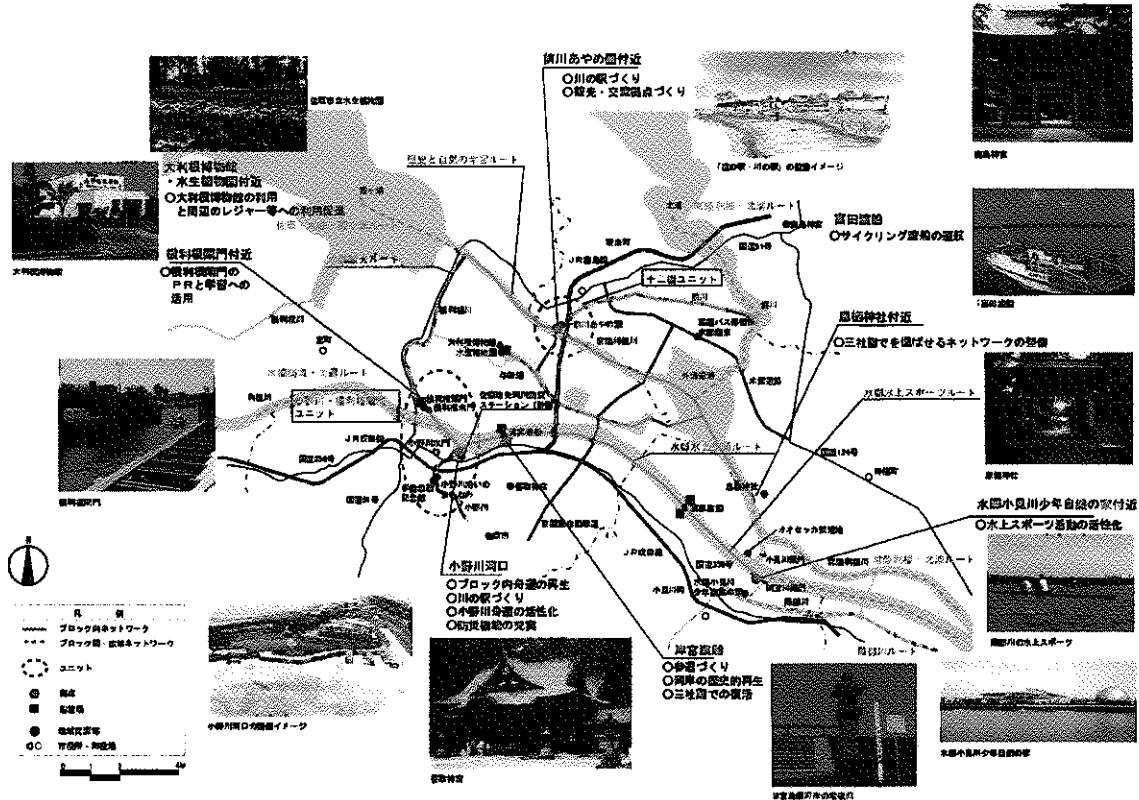


図2-5 水郷ブロックの舟運・河岸復活イメージ図

Fig.2-5 Imaginary Diagram of Boat Transport and Restoration of the Riverside in Suigo Block

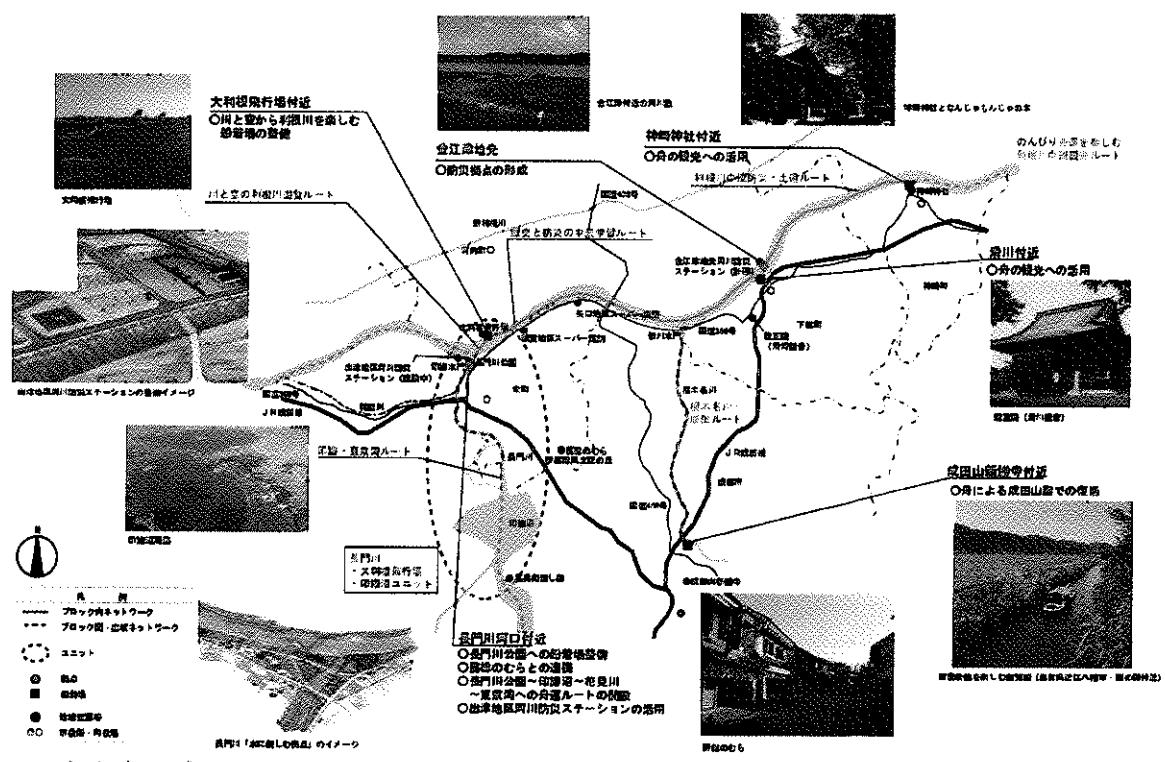


図2-6 中流ブロックの舟運・河岸復活イメージ図

Fig.2-6 Imaginary Diagram of Boat Transport and Restoration of the Riverside in Midstream Block

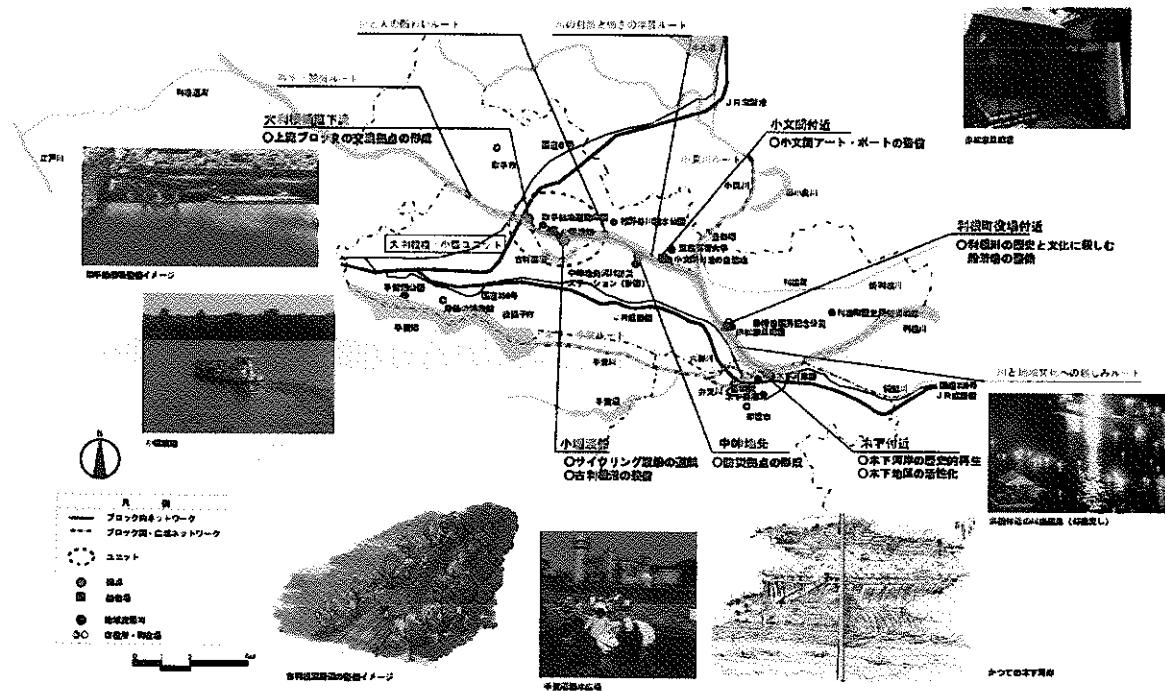


図2-7 上流ブロックの舟運・河岸復活イメージ図

**Fig.2-7 Imaginary Diagram of Boat Transport and Restoration of the Riverside in Upstream Block**

## (2) ソフトに関する計画

### 1) 地域に即した舟運計画

地域ごとの独自性を踏まえた舟運計画が、地域の個性の創出につながると考えられる。

そのため、地域資源（歴史的資源・自然的資源・観光資源等）を、舟運・河岸復活のためにどのように活用し、目的に応じた舟運・河岸のあり方、舟の種類などの検討を行い、今後の具体的な整備方針につなげていく。

## 2) 利根川下流域の交流計画

地域ごとの個性ある舟運を軸として、地域の人々や産物の交流をおこなうことにより、お互いを身近に感じることができる。そのことが利根川下流の一体感の創出と地域振興につながっていくため、利根川下流の人と物の交流計画を策定する必要がある。

交流計画で検討すべき課題には次のようないわゆる課題がある。

①自然的資源、歴史的資源、特産品などの地域資源の活用方策

②交流のテーマ、主体となる活動母体、  
舟や川の活用方法

### 3) 川を学び川に親しむ計画

利根川を地域の財産として考え、活用していくためには、地域住民が川に目を向け、川を知ることが重要である。

そのためには、自然的資源や歴史的資源など地域資源の活用方法を検討する。また、川を学び親しむイベントを実施し、学習活動の継続定着につなげていく計画を策定する。

## 2-3 沿川の協働計画

舟運・河岸復活にむけて、川から地域を考えていくためには、市町村・団体・住民が連携・協働して取り組むための枠組みとその実践を協働計画として策定する。

ワークショップ等により、各市町村の関係部署が連携して協働しながら、舟運・河岸復活のシンポジウム・イベント等の具体的行動を実践し、舟運計画や川づくり計画への住民参加を行うことなどへ反映する。

### 3. 行動計画

行動計画では次の3つを提案する。

- ① 下流域全体と各ブロック別の行動スケジュール
  - ② 行政・地域住民等、様々な主体のパートナーシップによる協働計画

③ 行動計画の第1段階のうち、すぐに着手できることが可能な、具体的取り組み

### 3-1 取り組みの流れ

舟運・河岸復活の実現にむけての基本的な取り組みの流れを示す。

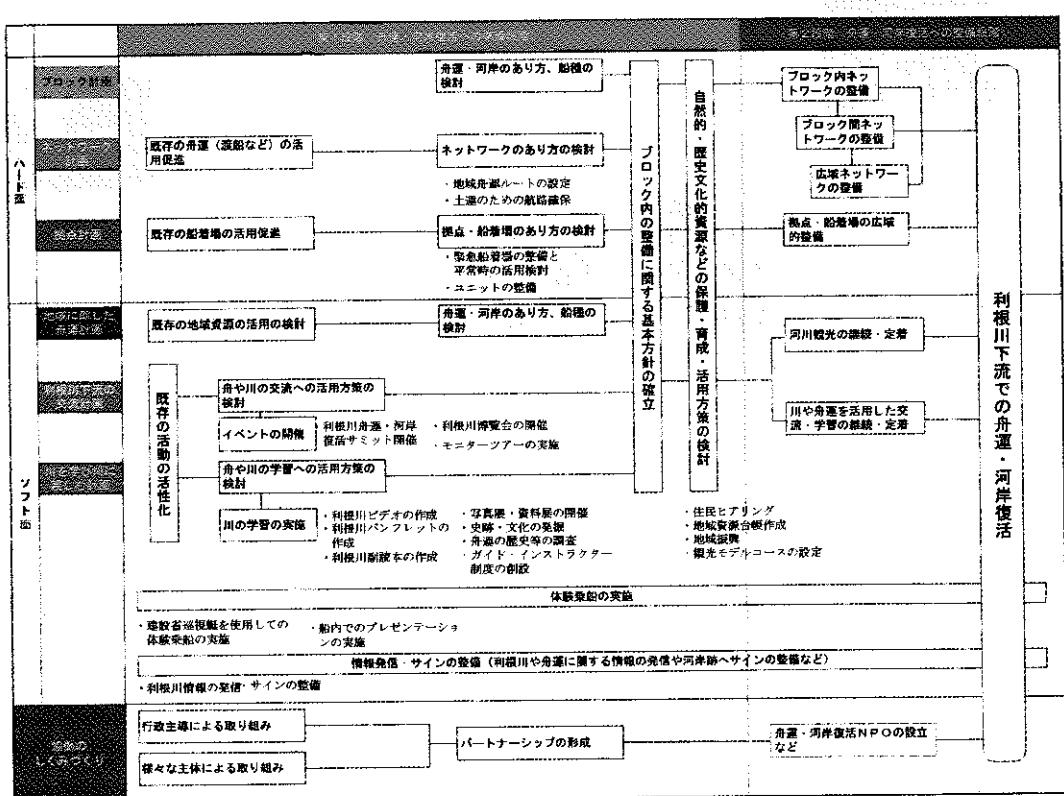


図3-1 行動計画のイメージ

### **Fig.3-1 Image of Action Plan**

### 3-2 協働計画

#### (1) パートナーシップによる舟運・河岸の復活

舟運・河岸復活を実現していくためには、地域住民、産業・経済団体、自治体が連携し、役割分担をしながら事業を推進していくこと

が重要である。

このため、建設省、沿川自治体、地域住民・団体、企業が参加するパートナーシップづくりを進めていく必要がある。

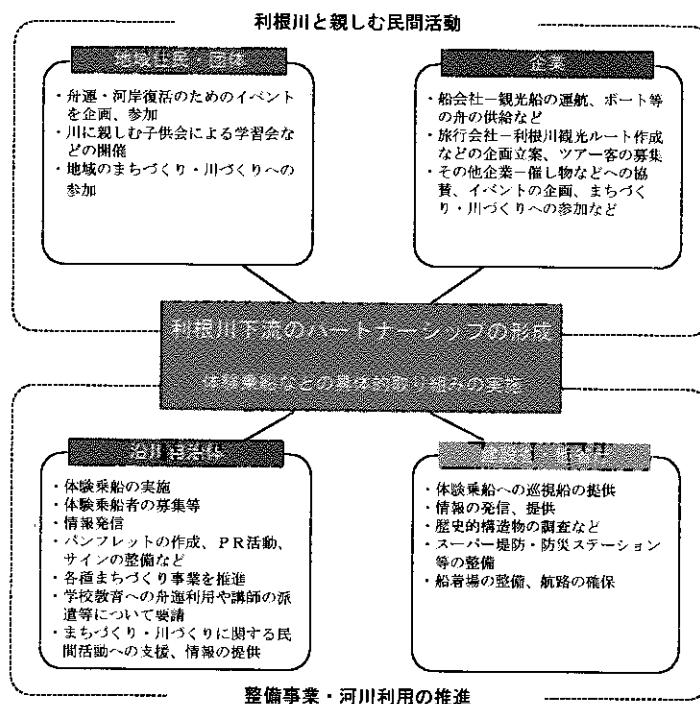
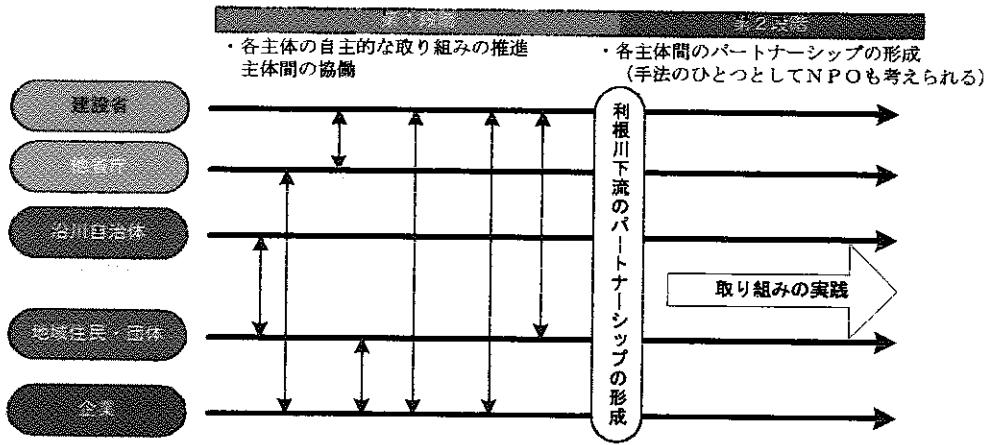


図3-3 パートナーシップによる取り組みのイメージ

Fig.3-3 Image of Measures Through Partnership

## (2) 活動の実践

- 1) 舟運・河岸復活に向けての周知・啓発  
体験乗船・イベントの実施、舟運河岸の研究、PR・情報発信などの周知・啓蒙活動を行う。
- 2) 河川空間を利用した自然学習・スポーツ活動・住民参加型川づくりの展開  
高水敷や水面を利用した自然学習や歴史学習、水上スポーツ活動などを推進していく

くとともに、住民参加による川づくりを推進し、情報提供の支援を行っていく。

## 3) 住民参加型組織づくり

個別活動の充実と協働活動の創出から、行政が各主体間の連絡機能を果たしつつ、段階的に民間が主体となった行政・地域住民・団体企業等が広く参加した舟運・河岸復活の母体となる仕組みづくりを行っていくことが必要である。

### 3-3 具体的取り組み

利根川下流の舟運・河岸復活に向けて、それぞれのブロック毎および、利根川下流域全体での取り組みを次に示す。

#### (1) 体験乗船・イベントの開催

##### 1) 体験乗船

- 建設省巡視艇や渡船を利用した体験乗船
- 他機関や各種団体へ体験乗船参加の呼びかけ
- 体験乗船の学習教材として、副読本・ビデオ等の作成
- 地元教育関係者等へのガイド要請や市民参加によるガイドの育成

##### 2) イベントの開催

- 利根川の舟運・河岸復活に関する情報交換等をテーマとしたサミット開催
- モニターツアーの実施
- まちの一品等の物産と子供の交流イベントの開催
- 川船やボートによるスポーツ・レクリエーションイベントの開催

#### (2) 舟運・河岸復活のための基盤整備

##### 1) 情報発信・サインの整備

- インターネットの活用による情報の発信
- 河川防災ステーション内に情報コーナーを整備
- 河岸跡や市街地に利根川舟運の歴史などを彷彿とさせるサインを整備
- 川の一里塚の整備
- 公共施設やＪＲ駅等への情報コーナー設置

##### 2) 船着場の整備・航路の確保

- 建設省管理用船着場、河川防災ステーションの緊急用船着場を平常時にも利用できるように整備
- スーパー堤防や後背地の整備に活用するための浚渫土の運搬
- 緊急時に活用できるよう水上ルートを確保し、そのルートと一体となったサイクリングルート・自然探索ルートな

どのネットワーク化

#### (3) 利根川の学習

##### 1) 川の学習

- 体験乗船等で活用するための、流域景観、利根川の歴史、舟運・河岸、沿川の物産、川の生物等に関するパンフレット・学習副読本・ビデオ等の学習教材の作成

- 教育委員会・学校・地元研究団体・郷土史家等が連携した子供学習会、写真展、絵画展等の開催

- 舟運・河岸に関連する文化財・資料の調査

- 学習の講師役となる教育関係者・船頭・スポーツ指導員等へのインストラクターとして要請

##### 2) 学習拠点づくり

- 防災ステーション施設の平常時の利用
- 地域の博物館、資料館等の既存施設のネットワーク化と情報発信拠点としての活用、道の駅・川の駅、公共施設等への情報コーナーの設置

## 4. 終わりに

箱物を重視し、人々の目が川から遠のいたバブル時代から、平成9年の河川法の改正に象徴されるように、治水・利水・環境の総合的な河川整備が求められるようになった。利根川流域でも利根川を地域の資源として見直し、川を媒介にしたまちづくりに関心がむきはじめた。

本稿で述べた舟運・河岸復活構想は、濃厚な歴史と文化に縁取られた利根川筋の環境資源を、来るべき21世紀に継承するために、かつて利根川にあった舟運の復活を起点として、川を活用した地域づくりを目指したものである。その実現のために、行政のみならず、地域が連携・交流し、今回提案した事項を着実に推進していくことが必要である。

江戸時代や明治時代の舟運は物流中心であ

った。しかし、現在では運搬コストやスピード化の観点から、利根川で物流を中心とした舟運を復活することは時代に即さないものと考える。人々が余暇活動やゆとりを求める今日においては、レクリエーションを主目的として舟運の復活を図ることが適當と考えられる。レクリエーション的な舟運によつても、川の機能・川と人との関わりの歴史や文化なども同時に考えうる機会が与えられるであろう。

イギリスのナロー・ボートやフランスのVNFが管理しているミディ運河やローヌセート運河での舟運は、観光・プレジャー目的として利用され、水辺の風景や古い構造物に触れることにより楽しみながら「運河や川」に学ぶ舟運の好例である。

本構想を具体化していくために、震災等の緊急時に備えた舟運による救援ルートの構築をきっかけとすることも有効な方策と考えられる。

この舟運・河岸復活構想の検討にあたり、意見、ご指導を賜りました「舟運・河岸復活研究会」委員、建設省、地方自治体等の関係各位にこの場を借りて心より御礼申し上げます。